

### 【目的】

「里川」というコンセプトがどのように受け止められるかは、最終的には個々人の「想い」に委ねられるものですが、まずは、身近な「川（水）」に興味を持ち、考えてもらう入り口が必要です。

振り返って、日常生活を取り巻く「水」については、実際に生活の中を「通過」する水はまだしも、直接生活に関わらない水、あるいは間接的に使用している水（目に見えない水、バーチャルウォーター）については、意図的に認識しない限り、気づきを得ることは困難です。

そこで、里川の入り口として、わかりやすく楽しみながら、水に対する「気づき」を持てる手法を提案したいと考えています。

具体的には、「身近な地域での水収支」調査手法を開発したいと考えています。水収支については、マクロ環境での研究、あるいは地域における精緻な水循環の把握を目的とした研究は行われていますが、精度は低くても理解しやすい形で、小学校中高年生が自分たちで調べ、結果が出せるようなモデルを作ってみたいと考えています。

### 【対象】

身近な水に対する実感が持てる範囲、かつ色々なデータが得られる範囲として、まずは市町村の単位が考えられます。自治体の単位であれば、行政情報としてデータを得ることも比較的容易と考えられます。

一方、「川」の括りでは、流域を一つの単位とすることが望ましいと考えられます。流域単位でのデータの収集がどの程度可能か、調査が必要ですが、今回は両面から検討しています。

具体的な題材として、「阿久比川」ないしは「半田市」を用い、検討を進めます。

### 【調査の内容】

一つの地域における「水」を分解してみると、各視点ごとに以下のような切り口があると考えられます。

#### ①「使う」水と「通り過ぎる」水

「使う」水としては、水道水、地下水、工業用水、農業用水があります。都市部においては、地下水を除いてほぼ地域外から供給されるものと考えられます。加えて、③で述べる「見える水」と「見えない水」の概念を加えることで、どれほどの水が生活に必要なのか、理解しやすくなるものと考えます。

「通り過ぎる」水は、降水量と地域外からの流入量が算定できれば把握できます。但し、降水による灌漑効果の扱いについて、整理が必要です。

#### ②「生活に役立つ」水、「危険な」水

「使う」水は「役立つ」水とほぼ同義と考えられます。但し、無駄に使っている部分もあり、何らかの評価ができるか検討が必要です。一方、「通り過ぎる」水が一時期に集中すると、「危険な」水に

変わります。それを防ぐための手段（治水）が想定している水量と、発生可能性を掛け合わせれば、危険な水の量が算定できると考えます。

### ③「見える」水、「見えない」水

「使う」水の中に、バーチャルウォーターの考え方を、簡略化して導入できないか、検討してみたいと考えています。正確である必要はありませんので、簡易的に算定する方法を検討したいと考えています。（例えば食べ物に用いられるバーチャルウォーターを見積もる など）

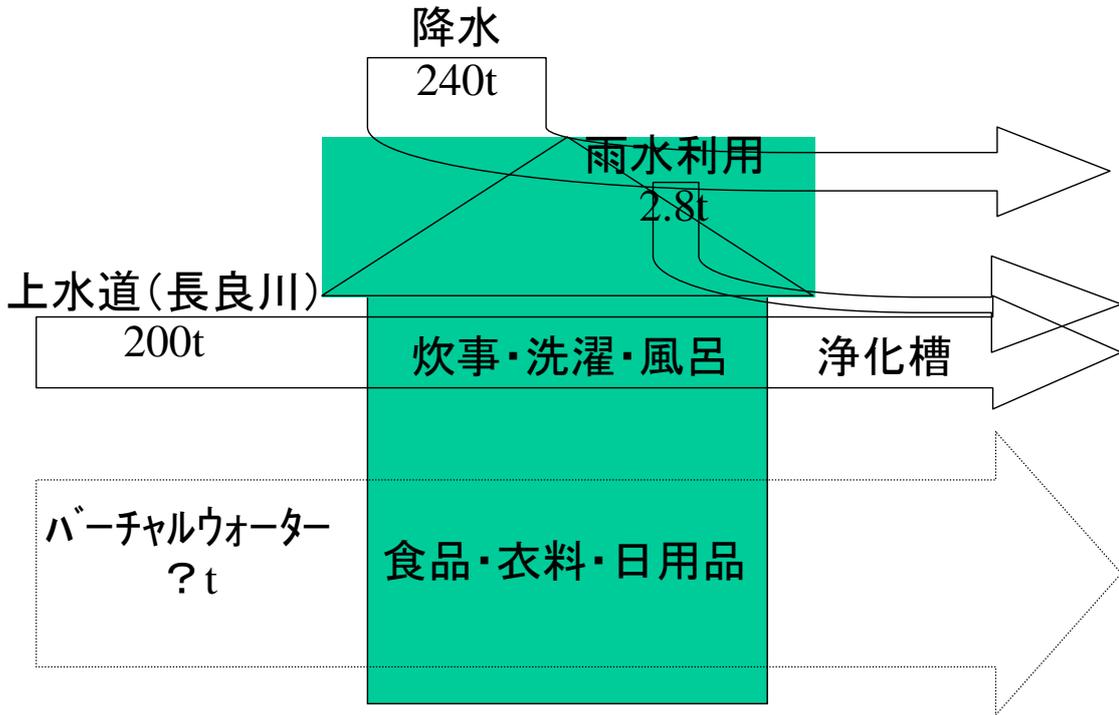
### ④「活きた水」

非常にあいまいな言い方ですが、単なる用水路ではなく、「川」や「池」として自然や景観に対する役割を果たしている水について、何らかの定義分けができないか、考えてみたいと思っています。

これらの視点を基に、自分が住んでいる地域の水収支、特に「見えない」水に依存している生活の実態を認識することで、水とのかかわりを知る手がかりをもつツールとして使用できないか、検討していきます。

付録：A 家及び半田市における水収支の概念図

### A家における水収支(年間)



### 半田市における水収支(年間)

